

淨樂寺の佛像と運慶

久野健

はじめに

本年四月初旬、三浦黨について研究されている岩間尹氏より、當研究所の熊谷宣夫氏を通じ、逗子市蘆名の淨樂寺の佛像の調査を依頼してきた。われわれは、數年前より關東所在の古彫刻について調査をつづけているので、その一環として喜んでお引受けし、四月二十日同寺におもむいた。その際、同寺の佛像の一體、毘沙門天像の胎内より、文治五年大佛師運慶が小佛師十人をひきいて作つた由を傳える銘札を発見した。これは、今後の運慶研究は勿論のこと、日本彫刻史を考える上にも重要なことと思うので、以下當日の調査を中心に、この銘札の意味するところを述べてみたい。

一

淨樂寺の本堂には、現在、五體の佛像が安置してある。堂の中央には、大正十五年に國寶（現在重要文化財）に指定された阿彌陀三尊

像、その左右の厨子にそれぞれ毘沙門天像及び不動明王像を安置する。いずれも堂々とした彫刻であるが、おしいことに阿彌陀三尊像は、後世の金箔により、また毘沙門天、不動明王像は、後世の彩色により、その尊容を損じ、觀照をさまたげている。いまこの五體の像の造像法および作風を列記すると次の通りである。

阿彌陀如來坐像（圖版Ⅱ・挿圖1・2）

阿彌陀如來像は、坐高一四〇糎、ヒノキ材、寄木造、彫眼の像で、體軀は略々中心線でそれぞれ前後左右に伸び、兩腕は柄にて肩の附根に差込んでいる。膝も別木である。頭部は、體軀とは別木で、耳後にて前後に、中央にて左右に伸び、四材から作られ、三道の下方で體軀に柄差となつている。前記したように、現在の金箔及び彩色は後世のもので、胎内の修理銘札によれば、寛文五年（一六六五）及び文化十二年（一八一五）天保八年（一八三七）に金箔や彩色が加えられたことがわかる。

興福寺南圓堂の不空絹索觀音像に近い作風を示している。

觀音菩薩立像（圖版Ⅲ・挿圖3・4・5） 勢至菩薩立像（圖版Ⅲ）

兩像とも、像高一七八糎ほどの立像。ヒノキ材の寄木造、彫眼の像である。造像法も兩者共通し、體軀は左右に矧ぎ、兩腕は別木で體軀に矧付け、頭部も別木で作リ、頸の下數糎のところで體軀に挿入するように作られている。頭部は左右矧ぎである。兩腕から垂れる天衣は後補、銅製透彫の寶冠、胸飾、持物も後補。金箔彩色等は、天保八年（一八三七）に加えられたものであることが兩像納入木札銘から分る。

兩像は、きわめてどぎつい金箔が置かれているにも拘らず、その

挿圖1 淨樂寺 阿彌陀如來坐像

挿圖2 右同像 頭部

丸い顔付、胸の厚い體軀、きわめて量感に富んだ彫刻である。螺髮は粒が小さいが丈が高く、眉は弧線が長く、唇の曲線はアクセントが強い。耳は、耳穴の彫りが普通のものより著しく深い。肥満した體軀をつつむ衲衣は皺數が多く、しかも、その曲線が複雑にみだれているところに特長がある。刀法も鋭く、彫りも深い。全體に、

挿圖3 淨樂寺 觀音菩薩立像

挿圖4 右同像 背面

姿勢はまことに抑揚にとんでいてやわらかい。面相は本尊同様の特色を示すが、體軀は、本尊像ほどは肥満していない。天衣や腰裳の衣文線も、繁雜にならず、彫りが深い。背面の衣文も、省略することをせず、丁寧にほりきざんでいる。兩像では頭頂の寶髻が著しく高いのが注目される。

毘沙門天立像（圖版IV a・挿圖6・7）

毘沙門天立像は、像高一三九・五糎、ヒノキ材、寄木造、玉眼の像である。造像法は、體軀の右側半身は一本、左側は前後に矧いで作っている。兩腕兩脚は別木。頭部も無論別木で、前後矧ぎ、さらに左右側面に別木を矧ぎつけている。彩色は、胎内木札により、寛政元年（一八七九）に塗がかえたものであることが分る。持物、光背

挿圖5 淨樂寺 觀音菩薩立像 頭部

等は、後世のものである。この像は、やや腰をひねり、右脚をあげ、右手を高くあげ、斜め側面をむいた動的な姿に作られている。四肢、體軀、頭部の均整もよくとれているが、何といても、後世

挿圖7 右同像 頭部

挿圖6 淨樂寺 毘沙門天立像

の彩色に禍されて、制作當初の生命感をそがれている。しかし、頭部をよくみると、眼鼻が上部に上つた顔の作りや、顎のはつたところなどに特色が見られる。私はこの像を一見した時、直ちに湛慶作の雪溪寺毘沙門天像を聯想した。

不動明王立像（圖版IV b・挿圖8・9・10）

本尊に向つて右側の厨子に安置されている不動明王像は、像高一三四糎、ヒノキ材、寄木造、玉眼の像である。この像は、他の三像がいずれも頭部が簡単にぬけるように作られているのに對し、頭部が體軀に打ちつけられているので、構造は不明であるが、ほぼ他の四像に近い造りのものである。臺座、持物等は後のもので、彩色も、毘沙門天像と同様、寛政元年（一七八九）のものであることは、毘沙門天像胎内の木札から分る。

この像の彩色は、頭部、胸、兩腕等で、まだらに剝落しており、他の諸像よりも、いっそう觀照をさまたげるが、厨子から出してみると、なかなか量感に富んだ作風をもっていることが分る。體軀も抑揚があり、背面の衣文等も省略せずに、きちんと彫られている。

二

次に、阿彌陀三尊及び、毘沙門天立像の胎内から出てきた納入物について述べてみよう。納入物のうち、最も重要なのは、毘沙門天像の胎内から發見された文治五年の銘札（圖版V）であるから、ここ

では、まず、毘沙門天像の納入物から觸れることにする。毘沙門天像の胎内から出てきたものは次の通りである。

- 一 文治五年銘木札一枚
- 一 寛政元年の修理銘札、小木像一軀及寛政元年不動毘沙門天の修理を伝える包紙一枚

(附載一 参照)

文治五年銘の木札は、月輪形の下に蓮華座を墨書し、その下に長い蓮莖のついた形のもので、總高は七一・五糎、月輪の直径は一四・五糎蓮莖の巾は五糎、厚さは一・二糎ほどである。表は月輪の中央に、多聞天の種子(味)を墨書し、蓮莖部には、「一切如來心秘密全身舍利寶篋印陀羅尼」と記し、次に梵字四行をなかなか達筆にかいている。この梵字は左側面から裏面にまで續き、側面一行、裏面に一行かかっている。右側面には、「大日如來眞言」として、梵字六字を書き、つづけて「多聞天真言」と記して梵字十五字を書く。裏面には次の様な文字が墨書されている。

大願主平義盛芳縁小野氏
文治五年己酉三月廿日庚戌
大佛師興福寺内相應院勾當運慶小佛師十人
執筆金剛佛子尋西淨花房

寛文元年の修理銘札は高さ一四・五糎、巾五・八糎のもので、表に

不動明王
再興
毘沙門天

淨樂寺の佛像と運慶

裏に

寛政元己酉歲霜月吉日

鎌倉扇ヶ谷大佛師三橋永介

とある。包み紙も、この毘沙門天、不動明王像が、寛政元年十一月に彩色をほどこしたよしを記してある。小木像は高さ一〇・七糎、白毫、眉、目を墨書し、肉髻、口を朱でかいたもので、背面に「秋屋村梶谷權工門」と墨書されている。

さて、前記の文治五年の銘札は、果して當初のものであろうかということは、これら諸尊像を考える上に最も重要な點であることはいうまでもない。それには、幸い、今日ほとんどすべての學者により認められている、伊豆願成就院に傳わる著名な文治二年の銘札(挿圖11・12)と比較するのが最も穩當であろう。願成就院の銘札は、いまさらここに述べるまでもないが、寶曆二年(一七五二)北條美濃守氏貞が、不動、毘沙門天の二軀を修理した時に、兩像の胎内から現れたものという。^{註一}

その不動、毘沙門天の二銘札は、ほぼ同形式のもので、表には梵字で寶篋印陀羅尼を記し、裏には

文治二年歲次丙午五月三日奉始之
巧師勾當運慶
檀越平朝臣時政
執筆南無觀音^{註二}

とある。いま、淨樂寺毘沙門天像の銘札をこれと比較すると、その記述の形式もまことに近い。さらに、書體からしても、淨樂寺銘札は、文治當初のものとしてさしつかえないだけでなく、和田義^{註三}

盛と北條時政との關係や、社會的地位からしても、義盛が運慶に造像のことを依頼するということは、大いにありうべきことのように思われる。さらに梵字について、高田修氏の御示教によれば、淨樂寺の方が、願成就院のものよりもいつそう優秀であるという。淨樂寺の毘沙門天像銘札の梵字にも誤りがあるが、これは、當時のものにはすべてこのような誤りがあるそうで、願成就院の銘札にかかれた寶篋印陀羅尼が、五行目と六行目の間に一行とばして書かれているのに比べると淨樂寺像のものはいつそうとのつている。

また、この銘札では、運慶は、大佛師興福寺内相應院勾當運慶と書かれている。從來運慶が大佛師になつた時期について

は不明とされていたもので、さらに、運慶と興福寺との關係に至つては、林屋辰三郎氏が「佛師運慶について」^{註四}という論文を發表してから、最近では、常識的になつてゐるが、同氏により紹介された「峯仲子私田賣券」以外には興福寺との關係を明瞭に伝える文獻は

今のところ見あたらない。そうだとすれば、この銘札は、後世の運慶に關する知識などではとうてい書けないものであつて、まず文治五年當初のものと考えて差支えないのではないだろうか。

さて、ここでもう一つ、この銘札が文治五年當初のものであつたにしても、この銘札が現在の毘沙門天像のものであるかどうか。い

持つてゐることはたしかである。

ここで思い浮ぶのは、先にふれた伊豆願成就院の毘沙門天像の場合である。本像の運慶の銘札は、古く寶曆二年に發見されたが、國寶指定の仕事が始つてから、銘札のみ國寶に指定され、毘沙門天及

挿圖11 願成就院毘沙門・不動銘札

挿圖12 右同裏面

いかえれば、銘札のみ古く、像は後世のものではないか、ということはない。當然検討せねばならない。これについては、前に述べたようにこの毘沙門天像は、後世の惡彩色により、彫刻を損じ、像それ自身の様式からだけでは明示することは難かしい。しかし、本像は、決して鎌倉當初の制作としても矛盾しないものを

び不動明王像の指定を受けなかったのは後のものに變つてしていると判定されたためであろう。淨樂寺の毘沙門天像の場合も全く同様なのであろうか。このような特殊な場合が二度までおこるということはいかにも不自然ではないだろうか。

まして、運慶の確實な遺品は、安元二年（一二七六）の制作である円成寺の大日如來像から、建仁三年（一二〇三）の東大寺南大門の仁王像までは、全く知ることができない。この空白期間に、運慶がいかなる作風のものを作っていたかは、比較するべきものはないわけである。淨樂寺の毘沙門天像が、湛慶の毘沙門天に比較的類似しているということは、湛慶が、父の作風をうけついただとも考えることが出来る。私は、以上のような理由から、この銘札と毘沙門天像とは別にきりはなして考えなくてもよいのではないかと考えるのである。

三

次に、阿彌陀如來像の胎内墨書銘および、納入物について述べてみよう。阿彌陀如來像の胎内胸のところには卍字を墨書し、背面は一切如來心秘密全身寶篋印陀羅尼等の文字が數行にわたつて書かれている。この書風は、先の毘沙門天像の文治五年銘札と同筆と考えられるもので、この阿彌陀如來像が、先の毘沙門天像と一具の像であることを伝える貴重な資料である。阿彌陀三尊及び毘沙門天、不動明王像の組合せは、また吾妻鏡に傳える願成就院の諸尊の組合せと同様で、^{註五}後述するように、この阿彌陀如來像と願成就院の阿彌

陀如來像との様式的類似は、本像がまた運慶の手になることを暗示しているよう。

その他阿彌陀如來像の胎内には次のような納入物がある。

- 一 弘治三年修理銘札 ^{註六}一枚
- 一 寛文五年修理銘札 一枚
- 一 月輪形に長く蓮莖のついた木札銘 ^{註七}一枚
- 一 寺の本願云々の木札 一枚
- 一 文化十二年修理銘札 一枚
- 一 天保八年修理銘札 一枚
- 一 小佛像及び塔婆形薄板多數

（附載・二 参照）

以上の通りである。

四

觀音菩薩立像

觀音菩薩立像にも、胎内に阿彌陀如來像胎内墨書と同筆の陀羅尼が墨書されている。納入物は次の通りである。

- 一 寛文五年修理銘札 一枚
- 一 月輪に蓮莖のついた木札銘 ^{註八}一枚
- 一 香譽淨光云々の木札銘 一枚
- 一 刷佛 一枚
- 一 天保八年修理銘札 一枚

（附載・三 参照）

勢至菩薩立像

觀音菩薩像同様、阿彌陀如來像と同筆の陀羅尼が胎内に墨書され

ている。胎内納入物は次の通りである。

一 月輪形に長く蓮莖のついた木札銘一枚 註九

一 天保八年修理銘札一枚

(附載・四 参照)

以上の通りである。不動明王像も恐らく胎内納入物を有するものと思うが、首がとれないため、現在のところ不明である。

五

以上の納入物によつて知られる阿彌陀三尊及び毘沙門天、不動明王像の修理及び、その結果について書かれた新編相模風土記稿の記事や現在の寺で傳えるところを表に示すと次頁の表のようになる。

現在淨樂寺は、同寺の由緒書によると勝長壽院とも號し、本堂の阿彌陀三尊像は、文治元年(一一八五)四月十一日賴朝が父義朝の菩提を祈るため、奈良の佛師成朝に造らしめた勝長壽院の像を、同寺が建永元年(一二〇六)に大風で倒れた際、本寺に故あつて移したものと傳えている。ところが、この説は、納入物中の古いものには一切書かれていない。勝長壽院との結びつきは、文化十一年四月(一一八四)の木札に初めて現れ、阿彌陀三尊像を成朝の作とし、これは天保十一年(一八四〇)に書かれた新編相模風土記稿にも踏襲され、現在に至つたものであることがわかる。つまり、室町時代にはまだ、この阿彌陀三尊像を奈良の佛師成朝の作とする傳えは、なかつたことが分るのである。それに對し、たしかに文治五年當初のものと考えられる毘沙門天像内の月輪形銘札の梵字と、阿彌陀三尊像胎内の梵字が同筆であるということは、この三尊も毘沙門天像と一具のもの

ので、恐らく運慶の作と考えるのが一番自然であろう。

六

以上述べたように、淨樂寺の阿彌陀尊三像及び毘沙門、不動明王像の五軀は、文治五年三月二十五日、和田義盛と小野氏の發願により、大佛師興福寺内相應院勾當運慶が小佛師十人を率いて制作したのであらうと推定できる。もし、この推定があつていならば、從來ほとんど否定されてきた願成就院の阿彌陀如來像及び毘沙門天像、不動明王及び二童子像についても、再検討を加える必要を感じる。

いま、願成就院の銘札及び阿彌陀如來像(願成就院には、現在二軀の阿彌陀如來像があるがここでふれるのはすべて中品中生印の阿彌陀の方である。)、毘沙門天像、不動二童子像について、運慶研究史上、いかに考えられてきたかをふりかえつてみよう。

この銘札について詳述されたもののうち、最も古いものは、大正十二年二月に發行された日本國寶全集二の解説のようである。これには願成就院は文治五年、北條時政の建立で、當初阿彌陀三尊及び不動多聞天の兩像を安置したことが吾妻鏡に見えることを述べ、また、この銘札が寶曆二年に不動多聞の兩像から發見されたことを記し、

「兩像は爾後、不幸にして全く壞滅に委し、銘札二枚も其、歸すべき所を失つたが、造像銘記としての價值は秋毫も動かない。」

としている。さらに、現在の阿彌陀如來像については

「前に據げた阿彌陀三尊のうち、中尊だけは今に遺存し、甚勁健な手法に運慶其人の作たるを思わしめる。」

阿彌陀如來

觀音・勢至

毘沙門天

不動明王

胎内に梵字が書かれた。

造顯、胎内に梵字が書かれた。

文治五年三月廿日義盛及び小
野氏により發願され、興福寺
相應院運慶により本像は作ら
れた。銘札はこの時のもの。

弘治三年堂の修理が行われた。尊像の修理が行われた。願主は沙彌善昌である。(この際すでに本像が運慶の作であることが分らな
なつていたらしい。)

寛文五年五月十五日觀音（恐ら
至）に金簿が加えられた。（現
 在兩像に納める月輪形の銘札
 の文字はこの時のものか。

寛文五年五月十五日再び佛像五體が痛んだので、鎌倉に住む心馨宗運による修理が加えられ、佛坐一具に金薄が塗られた。(現在同像に入っている月輪形の銘札の字はこの時のものか、文治五年を五天とかく書き方が共通している。)

寛文五年五月十五日觀音（恐ら
至）に金簿が加えられた。（現
 在兩像に納める月輪形の銘札
 の文字はこの時のものか。

鎌倉扇ヶ谷三橋永介により彩色が加えられた。

同上

阿彌陀・觀音・勢至は奈良の成朝の作、脇立の不動、毘沙門天は運慶の作と書く。鎌倉に賴朝祈願所の尊像があつたが、義盛の七阿彌陀堂にいれて移したものが、勝長禪院のことは東鑑に詳細に見えるところから推して、この四月に佛師幸衛門により再び彩色が行われた。

この年阿彌陀如來に金箔と彩色が加えられた。

この年に観音、勢至に金箔と彩色が加えられた。

新編相模風土記稿には、伊樂寺が、勝長壽院と號し、頼朝が鎌倉に建立した勝長壽院をもつてきたものと云っている。本尊阿彌陀は運慶の作といともいつている。文治五年二月二十日和田義盛の建立。建立の月は一月初つてゐる。

七阿彌陀堂の第二

毘沙門天像の厨子が造られた。厨子の扉に阿彌陀三尊は成朝の作、不動毘沙門は運慶の作と記す。

不動明王像の厨子が造られた。

現在

淨樂寺の由緒書に、勝長壽院移建説が強調されている。すなわち、文治元年四月十一日頼朝が、義朝の菩提を祈るため建立、阿彌陀三尊は成朝が奈良から来て作ったもの、不動毘沙門天は運慶の作、建永元年に勝長壽院が大風に破損した際、故あつて政子と義盛により當所に移されたものという。

一九

と結んでいる。

すなわち、大正十二年頃には、現在の不動毘沙門は銘札とは結びつかないが、阿彌陀如來だけは當初のものと考えられていたことがわかる。ところが、この阿彌陀如來も、昭和八年に發行された國寶全集五五の解説では本像が、潑刺清新な氣の漲ぎりに鎌倉も早い頃のものと考えると述べたあと

「……とはいへこの像を本寺所藏の造像銘札に事よせて運慶の作に擬することは早計なるべく、寧ろ彼の作とせられてゐるかの円成寺大日如來や、興福寺北圓堂彌勒像などと較べて何處となく都らしからぬ様子、特異な手法等が看取せられて、彼の作と言ひ難いものがある。」

と述べている。これは、大正年代、円成寺大日如來像の銘文が發見され、運慶の初期の作風が明瞭になつたので、これとの比較から、願成就院像が否定されるに至つたものであらうと考えられる。これ以後、運慶の作品について書かれたものは數十に及ぶが、ほとんどすべてが、銘札は認めるが同寺の諸像は別のものと考えようになつた。^{註一〇}

しかし、果してそうだろうか。私はこの疑問を解決すべく、願成就院の調査に出かけ、同寺の像と淨樂寺像との比較をすることができたが、兩者の間には、單に銘札の書き方が共通しているだけでなく、幾多の共通點を見出すことができた。

淨樂寺の諸像と願成就院の像とを比較すると、まず兩者は、ともに阿彌陀三尊及び毘沙門不動明王の組合せであるという點に氣がつ

く。もつとも、願成就院では、阿彌陀の脇侍は失われ、また不動に二童子をそえる點は違つているが、本來は、阿彌陀に觀音勢至の像が脇侍としてあつたことは吾妻鏡に傳える通りであつたらう。また兩者は阿彌陀三尊^{註十一}（前記したように願成就院の脇侍は不明）を彫眼につくり、毘沙門、不動明王を玉眼に造つていることも共通している。像高に於てもたいへん近い。兩者の像高は次の通りである。

	淨樂寺	願成就院
阿彌陀如來像	一四〇糎	一四三・五糎
觀音・勢至像	一七八糎	
毘沙門天像	一三九・五糎 (鬼共像高 一五六糎)	一四七糎 (鬼共像高 一六二糎)
不動明王像	一三八糎	不動明王 左童子 一三六・五糎 右童子 八二・六糎

次にこの二組を個々の像について比較してみよう。

阿彌陀如來坐像（挿圖13・14・15）

願成就院の阿彌陀如來像は、淨樂寺の阿彌陀如來像とは、印相を異にするが、その肥滿した體軀、まん丸い面相は全く共通している。眼も、願成就院像は伏目がちにとじ、淨樂寺像は、みひらいてゐる點が違ふけれども、兩像の細部を見ると、著しい共通點に氣がつく。すなわち、肉髻の形、小粒で丈の高い螺髮、耳の穴をきわめて深く刻り込んでゐるところ、長い弧線を描く眉、厚い唇の形等、全く同様である。さらに、衲衣の衣文も、皺數多く、彫りの深い



挿圖13

願成就院

阿彌陀如來坐像

點、機械的に平行にならず、複雑にみだれている形式、また、正面の腕の付根にかかる衲衣に山形の衣文を作り、側面の衣文では、肘下にあたる部分に三角状の衣文を刻んでいる點等、細部にいたるまで類似していることは、両者が同一佛師の手になることを物語っているのではないだろうか。

毘沙門天立像（挿圖16・17）

願成就院の毘沙門天像と、淨樂寺の毘沙門天像では姿勢がちがつている。淨樂寺像は、前記したように右脚をあげ、右手を高く振り

淨樂寺の佛像と運慶

挿圖15

同上像

背面

挿圖14

同上像

側面

挿圖16 願成就院 毘沙門天立像

挿圖17 右同像 上半身

あげ、やや右をむいているが、願成就院像は右脚を一步踏み出した姿で、右手も肩の高さまであげているに過ぎない。こうした姿の違いや鎧の違い等から、阿彌陀如來像ほどの共通点を見つけるのはむずかしい。こうした天部像の場合は、體の大部分が鎧におおわれているわけであるから、姿勢と鎧の制を異にするとなかなか比較はむずかしく、ほとんど頭部の比較が可能なだけになる。しかし、この残された頭部をみても、

願成就院像の下顎のはつた顔付、起伏の多い顔面の作りかた、短い鼻等、共通するものを見出す。ことに願成就院の毘沙門天像は肥後別當定慶作の藝術大學の毘沙門天像に著しく近い作風を示している。藝術大學の毘沙門天像には貞應三年（二二三四）の銘があり、あたかも願成就院の像は、この頃まで下げて考える方が合理的のようであるけれども、また、かかる形相の毘沙門天像は運慶により創められ、定慶がそれを忠實に踏襲したものとも考えられる。かかる形のきまつた天部像を、たまたま在銘の作に近いものがあるからといって、その年代に近く考えることも危険である。運慶により制作された形相のものも、古いものが失われ、鎌倉中期頃の模作のみ残った場合、あたかもそれが鎌倉中期の作風を示すと考えられがちなのではないだろうか。こうした意味で、願成就院の毘沙門天も運慶の作としてもよいのではないだろうか。

不動三尊立像（挿圖18—24）

願成就院の不動明王像は、絹をもつた左手をあげ、淨樂寺像は、左手をさげており、眼も淨樂寺像では半眼に開いている點等、形相上の違いがあるが、その肥満した體軀やプロポーション、肉付等は全く共通している。願成就院の不動は、鼻先が拙劣な後補のものにかわつてゐるが、これを取り除いて比較してみると、そのいかつい面相にも幾多の共通点が見出される。また、左肩にかかる條帛の衣文線、腰裳の制も、同作風を示している。

以上縷述したところは、從來、否定されてきた願成就院の諸像（不動の二童子についで後述する。）も、後世の手がかなり入っているにせよ、やはり、文治年間頃の運慶の作風を示すものと考えて差支えないのではないかと思う。なるほど、願成就院の阿彌陀如來像やその他の諸像も、かつて國寶全集の解説者が、「何處となく都らしからぬ様子」といわれたものをなにか持つている。これを、安元二年の円成寺の大日如來等の洗練された手法と比べると、全くこれが同作者の手になったものであろうかという疑問は、誰しもわいてこよう。ことに、これらの像が東國に傳わつた點も、いつそうこの感を助長している。

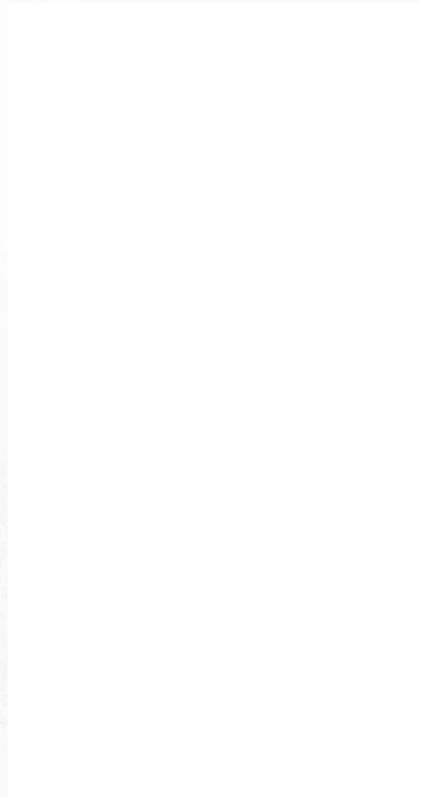
しかし、円成寺の大日如來像のあの若々しさは、推獎さるべきであるが、體軀のとらえ方や、衣文線は、まだまだ藤原風を脱却していない。それに反し、願成就院や淨樂寺の阿彌陀には、まるで藤原時代とは別のものがある。ことに願成就院の阿彌陀像は、廣隆寺講堂の阿彌陀如來等の古典に範を求め、それにさらに新しいものをつけ加えたもののように見える。願成就院像に近い印相の阿彌陀は、八世紀の法隆寺傳法堂の諸像や、興福院の阿彌陀、九世紀の伏見寺の阿彌陀や、廣隆寺講堂の阿彌陀等に見られ、天平貞觀の阿彌陀では普通のものであつたが、九世紀末の仁和寺金堂阿彌陀や、棲霞寺像以來、藤原を通じて、九品の阿彌陀のようなもの以外にはほとんど定印が普通となつた。こうした點でも、運慶が前代までの形式を

打ちやぶり、古典に範を求めていることがわかる。このことはその作風においても至るところに見られるが、この堂々とした胸のあつた體軀や、複雑に亂れた深い衣文等も、藤原末の定形化した定朝様

の否定に外ならない。ことにその男性的な面相に至つては、全く新たな時代の到來を物語つていゝといつてよいであらう。

円成寺の大日と願成就院の阿彌陀像との違いは、運慶の成長であると同時に、時代の成長でもある。大日如來に比べ、この阿彌陀如來像が、かけはなれたものに見えるのも、またそうしたところによるところが多いのではないであらうか。

また、もう一つには願成就院像や淨樂寺像の、「都らしからぬ様子」というのは、東國の武士である北條時政や、和田義盛等の注文による造像という點もあると思う。運慶が何故に東國の武士と早く結びついたかということは、別稿にゆずりたいと思うが、私の考えているところを結論だけ述べれば、十二世紀末において、すでに院



挿圖21 願成就院 不動明王左脇侍立像



挿圖22 右同像 背面



挿圖23 願成就院 不動明王右脇侍立像

挿圖24 右同像 背面

派や円派が朝廷や藤原氏と固く結びつき、慶派ののびる餘地はふさがれていた。そこに、源氏が優勢になつてきたのをいちはやく見てとつた慶派は、早くから東國の武士階級に新天地を求め、これが成朝の鎌倉下向となり、また、時政や義盛の注文を運慶が受ける立場になつたものではないだろうか。かかる東國武將の注文による造像の場合、當然、運慶も彼等の好む豪放な像を刻むことに意をもちいたことはたしかであろう。この努力が、その「都らしからざる様子」の像となつて現れたことは、充分考えられる。しかし、一方、こうしたことが運慶様を、大日如來像のような作風のものから、東大寺南大門の仁王像や、興福寺北圓堂の世親無着像のような豪放な作風への完成に、あずかつて力があつたものではないかと考えるのである。

八

もう一つ、淨樂寺毘沙門天像の胎内から、この月輪に蓮瓣を描き、それに蓮莖のついた銘札が出現し、文治五年運慶作の文字を見た瞬間、願成就院の諸像と共に想起したのは、高野山の八大童子の像であつた。というのは、數年前、東京及び奈良國立博物館に寄託になつてゐる八大童子中の制多迦（挿圖25）、矜羯羅、惠喜、惠光（挿圖26・27）の四童子像について、X線撮影を行つた際、その胸部に、丁度、淨樂寺の毘沙門天像の胎内から出てきたのと同様の、月輪の下に蓮瓣をつけ、それに蓮莖をつけた納入物（挿圖28）を發見し

たのである。^{註十三} もつともX線寫眞によつて知られる八大童子の胎内の木札は、淨樂寺像のものよりもはるかに精巧で、彩色までほどこされてゐるらしいが、同形であるという點に興味を覺えた。

高野山の八大童子像は、周知のように、高野春秋等に、建久八年（一九一七）に運慶が作つたものという記録があるが、^{註十四}類品が乏しいため積極的に、この記録を實證することがむずかしい。そのため、現在ではその秀作である點は認めても、運慶の作であろうと推定する學者は少い。つまり、この程度の記録に運慶の作と記されている遺品があまりに多いためである。

しかし、淨樂寺毘沙門天像の銘札が、同形式であるということ、運慶もかかる形式の銘札を用いたということを立證する點で重要である。もつとも、月輪形に長い柄をつけた銘札は、ほかにいくつか知られてゐる。すなわち、京都大念寺阿彌陀如來像の仁治四年の銘札、仁和寺悉達太子の建長元年の銘札等、さらに記録の上からは尊勝寺諸佛、鳥羽金剛心院釋迦三尊、九體阿彌陀、西林寺新御堂丈六佛等にも月輪に種字をかけたこの種の銘札が納入されたことが知られる。^{註十五}つまり、この形式の銘札は當時のかなり一般的な形式であつて、これだけから八大童子像と、運慶と結びつけることは早計であることはいふまでもない。しかし、淨樂寺の銘札の出現は、運慶もこの種の銘札を用いたことを語り、八大童子が運慶の作ではないかということ再考させるには充分である。さらに重要なことは、從來、運慶の遺品には、かかる腰裳をまとつた上半身裸形

の像が全くなかったが、淨樂寺の不動明王像及び、願成就院の不動童子像が運慶の作であると認められるならば、同形相のものを見出すことが出来るということなのである。

もつとも、八大童子はすべて同一作者の手になつたものとは考えられない。即ち八軀中の阿耨達童子及び指徳童子は、明かに別手で、恐らく他の六軀とは別の時期のものと考えられるが、残り六軀

挿圖26 金剛峯寺八大童子立像 惠光童子 挿圖25 金剛峯寺八大童子立像制多迦童子



挿圖28 金剛峯寺 八大童子立像 X線寫眞

院の左童子（制多迦か）の裳や腰帶の表現の類似、惠光童子や制多迦童子像の背面、腰から下の表現は、淨樂寺不動明王像の同部分と全く共通している。こうした共通點に加え、これら六軀の彫刻にみみざる緊張した作風は、恐らく記録に伝えるように建久頃の運慶の作

中の烏俱婆
迦童子の面
相と願成就
院の不動明
王像の顔付
の類似、ま
た肉付の近
い點、さら
に矜羯羅童
子と願成就

挿圖27 金剛峯寺八大童子立像 惠光童子

風を示すものとして差支えないものではないかと思うが、なお詳細な調査を行つてから再説したいと考えている。

九

また、この銘札の文字の傳えるところも重要である。まず、一行目の平義盛等が、文治五年頃、運慶に阿彌陀三尊及び毘沙門不動の造像を依頼したことは、從來の文獻には見られないところである。また、北條時政が、それよりわずか前に、同様運慶に阿彌陀三尊及び毘沙門、不動の造像を依頼して、同じく文治五年願成就院を建立し、それらの像を安置していることは、義盛と時政の深い關係を物語るものである。

二行目には、大佛師興福寺内相應院勾當運慶小佛師十人と記されている。先にもちよつとふれたように、運慶が大佛師職に補せられた時期は不明であつた。東大寺續要錄造佛篇には、建久五年十二月二十六日南中門二天の造佛のことを傳える記事で、西方天を大佛師定覺が小佛師雲慶以下十三人を率いて参加していることが見え、吾妻鏡の記事には運慶を雲慶と書いた個所が四例ある事實とあいまつて、運慶は、建久五年にもなお、小佛師だつたのではないかという説も發表されている。^{註十六}しかし、この銘札によれば、運慶は明かに文治五年には、大佛師であつたことが分り、先の願成就院の文治二年の銘札に、巧師勾當運慶とあるところから考えると、文治二年五月三日以後、文治五月三月二十日以前に大佛師に補せられていること

が判明する。またこのことから考えると、先の東大寺南中門の西方天の造佛に参加した小佛師雲慶は、運慶とは別人と見るのが正しいのではないだろうか。ただし東大寺僧形八幡神像の銘文中に、小佛師の中に運慶の名が加えられているのは、毛利久氏の説のように、結縁者の一人として加わつたものと考えるのがよいようである。もう一つ、興味あるのはこの大佛師の下に、興福寺内相應院勾當運慶と書かれていることである。前にも觸れたように、林屋辰三郎氏が「峯仲子私田賣券」の記事から、運慶が興福寺の西金堂衆の一人であつたと述べられたことは、運慶様式の成立を考える上に重要なこととして美術史界にも大きな反響を呼び、賛否の兩論があつたが、^{註十八}この銘札の記事は、文治五年頃には、たしかに運慶は、興福寺内の相應院にいたことが明確になつた。ただ、興福寺の相應院というのがどの邊にあつたものか、またこの銘文を執筆した「尋西淨花房」という人はどういう人かという點については現在のところ分らないのが残念である。

以上述べたところは、淨樂寺毘沙門天像の銘札から考えられる諸點であるが、あるいは發見のよろこびのあまり、推察の行き過ぎといふこともあるかも知れない。また、かかる新出のものは、さらに調査をかさね、熟考の後に發表することが望ましいが、その間にも運慶について考え、また論文を書く人も多いことと思ひ、ひとまず試論の形で發表し、諸先學の批判を仰ぎ、他日を期したい。

註一 この銘札については、大正十二年三月發行「日本國寶全集」二、「塔婆形銘札」

丸尾彰三郎氏「佛像内の納入品に就いて」昭和七年八月「國華」五〇一、五〇二。

石崎達二氏「佛師年代考」昭和九年一月「史蹟と古美術」十二ノ一等に詳しい。

註二 願成就院の二銘札は、ほぼ同文であるが一方には「南無觀音」の音の字を缺く。

註三 この銘札の文字の年代については、伊東卓治、藤田經世兩氏の御示教を得た。

註四 林屋辰三郎氏「佛師運慶について」昭和二年九月「佛教藝術」一三

註五 吾妻鏡卷八 文治五年六月六日の條

「爲北條殿御願、爲新奥州征伐事、伊豆國北條内、被企伽藍營作、今日擇吉曜有事始立柱上棟、則同被遂供養、名而號願成就院本尊者阿彌陀三尊并不動多聞形象尊也、是兼日造立之尊容云々、北條殿直被下向其所、殊加周備之莊嚴、令致鄭重之沙汰給、當所者田方郡内也、所謂南條、北條、上條、中條各並境、且執量祖之芳躅、今及練若之結構云云」。

註六 この修理銘札は、十六世紀中葉に、當時鎌倉地方佛像の修理等を盛に行つていた大佛師信濃快圓法印（快圓については、三山進氏「佛師快圓」昭和三四年五月發行「鎌倉」に詳しい。）が、この阿彌陀如來像を修理した時のもので、この中に、本像を作つた「同大佛師作者未聞不見之儀也」と書かれているのは、いかにも不思議である。このことは、すでに十六世紀頃には本像が運慶によつて作られたという所傳は失われていたことを傳えるもので、従つて、同銘札裏面の「大佛師興福寺相應院勾當運慶之御作也云云」というのは、後で書きこんだものであらう。

註七 この月輪形の銘札は、木部は古いものかも知れないが、明らかに蓮莖部等は、後世けずられ、後世の字で、「文治五^西天三月廿日勾當運慶」と墨書されている。

この銘札は大正以後、何回か専門家の目にふれ、かえつてこの造像銘から本像を運慶の作とすることに疑問をもたれたものではないかと思われる。書かれたものでは昭和三年八月發行の丸尾彰三郎氏「鎌倉」の彫刻』も、銘札はあとのものといわれているのは、まさしく、これらを指しているものであらう。

註八 これも本尊阿彌陀如來像の月輪形の銘札と同様、蓮莖部等がけずられ、後世の文字が書かれている。

註九 前記、觀音菩薩像のものと同様である。

註十 私が見得た範圍では、昭和三三年四月に、發行された田中萬宗氏著「運慶」で

は、願成就院の阿彌陀如來像を運慶の作と認めている。

註十一 前記、吾妻鏡、文治五年六月六日の條。

註十二 淨樂寺阿彌陀如來像と願成就院の阿彌陀如來像の衣文線の類似はすでに昭和三年十一月發行、松本榮一氏監修「鎌倉の美術」中水野敬三郎氏の解説にも指摘されている。

註十三 拙稿「X線による彫刻の實驗」昭和二年二月「美術研究」一五九號。

註十四 高野春秋七の不動堂の條に

「願主八條女院、不動明王者上人自作、二童子ハ運慶作、八大童子亦同刻也。被命□賴朝卿有庄園之寄附狀、堂前一心池之事、一説ハ大師鑿開、又説上人掘之、爲一心清淨之標示焉乎□□」とある。

註十五 同形式の銘札については、米山德馬氏「佛像の胎内と胎内奉籠物」昭和十八年「史迹と美術」第十四輯ノ二、五、第十五輯ノ一、五の内。第十四輯ノ二に詳しい。

註十六 林屋辰三郎氏 前掲文

註十七 毛利久氏「快慶」昭和二年九月。

註十八 否定論の代表的なものとしては、小林剛氏「佛師運慶の研究」昭和二年九月刊があり、肯定論の代表としては毛利久氏「定朝より運慶へ」昭和三年十一月「美術史」三一等がある。

昭和三十四年五月四日